令和４年度　「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　「まだ」から始まる　」

山口県　上関町立上関中学校　２年　小川（こがわ）　莉々菜（りりな）

毎年のように訪れる、豪雨災害。今年もニュースを耳にしました。浸水してしまった家、川の氾濫、そして私も目撃したことのある土砂崩れ。このようなニュースを目にすると、とても心が痛くなります。自分自身の体験はないけれど、被災された方の気持ちが、強く伝わってきました。

今から４年前の７月、西日本豪雨災害がありました。今振り返ってみても、とても怖かった１日がありました。その日も、親は仕事に向かい、私たち兄妹３人で家にいました。激しく窓を打ちつける雨に驚き、ずっと外を見ていました。テレビのテロップには繰り返し多くの地域の避難情報が出ていました。県内には大きな被害が広がっていたのです。上関の雨で驚いていた私は、比べものにならないくらいの地域に被害が迫っていることを知り、とても怖くなりました。

私の家にベランダは水槽のように水がたまり、ドアは開けられない状態でした。私たち兄妹３人みんな恐怖心を抱きながら生活していました。幸い、１日だけで大雨も止み、不安だった１日は過ぎていきました。あの日、私たち兄妹は普段は話題にすることもない「災害」について話をしました。親の留守中に避難情報がでたらどうするのか、どこに、何を持って行くのかなど、兄妹で話し合いました。そして、避難場所や持っていくものの準備、誰が持っていくのか、どの道を通って行くかなどの確認をしたのです。いつもは一緒にいない兄も、この日だけはリビングにいてくれて、頼りになりました。それほどまでに、いつ、何が起こってもおかしくない状況の豪雨でした。

しかし、このような不測の事態があったからこそ学べたこともありました。それは、より切実に被害者の気持ちが理解できたということです。西日本豪雨災害は大きな被害をもたらしました。しかし、私は当事者でないとわからないことを学びました。自然とともに生きている人間だからこそ災害について知り、自分、家族、そして、地域全体が備えることの重要さを理解することが大事だということを。

災害で亡くなる人の半数は逃げ遅れだと思われます。あなたの「まだ大丈夫」があなた自身の命を奪うかもしれません。わずかな判断の違いから、死に至るかもしれません。「まだ」この一言で自分の命が失われるとなると悔しくないですか。災害の時は余裕をもった行動が大切です。日頃から防災訓練に参加したり、防災グッズを準備し、家族とハザードマップを見ながら話し合い、こまめに気象情報を確認するなど、余裕をもって、日々の生活を送ることが大切だと思います。一人一人が気をつけることで一人でも多くの命を守ることができると思います。「災害は忘れたときにやってくる」、このことを心に留めて余裕をもって、行動していきたいです。

土砂災害、地震などの自然災害のときは、地域のみんなが仲間で、自然災害が敵です。
自分の命を守りながら、互いに協力して「一緒に避難所へ行こう」と声をかけあったり、高齢者の方と一緒に避難したり、中学生として出来る事をやっていこうと思います。そのためにも、災害のときだけではなく、日頃から声かけなどを行ってその日に備えていきたいです。

私には医療関係の仕事に就くという夢があります。救助が必要な方のもとへ駆けつけ、一人でも多くの命を救える人になりたいと思っています。かけがえのない家族や友達、そして被災された方

を適切に助けられる、頼られる人間になるのが夢です。そのためにも、地域の人たちと助け合い、自分の命はしっかり守っていきたいです。余裕をもった行動を取り、災害をもたらす言葉「まだ」をなくし、「もしも」のことを第一に考え過ごしていきたいです。そのためにも、家族との話し合いを大切にして、自分を守る「自助」、声をかけあう「共助」を実践していこうと思います。